

『律法学者たちの功罪』

'21/08/15

聖書箇所: マルコの福音書 12 章 35-44 節 (新約 p.93)

前々から話しておりますけれども、私の PC には、1 日何通も詐欺まがいの変なメールが届いてきます。あるものは一見して「おかしい」と分かるものもあれば…、あるものは、一瞬、「本物かな？」と思われられるようなものまで、様々です。多分、皆さんのところにも届いているのではないのでしょうか？ 偽物の宅配メール、あるいは、アマゾンプライムを解除しましたという、これまた嘘のメール、あるいはまた、契約もしていないはずのクレジット会社からのメールやオレオレ詐欺のような電話にフェイクニュースなど…。私たちの周りには、偽物の情報も溢れてしまっています。

命題: 当時の教師であった律法学者たちの問題点とは？

実は、聖書の中にも、にせ教師たち…、あるいは、にせ預言者たちに対する警告¹が何カ所も書かれてあります。…と言いますのも、いつの時代であっても、どのような分野であっても、間違っただけを教える教師たちがいるからです。しかも、悲しいことに、そういった間違っただけを教える人たちがまた、多いのです…。

今日、私たちが学んでいこうとしている聖書のみことばでも、イエス様は、「律法学者たちに気をつけなさい！」とおっしゃって、当時の宗教家…、つまり、民衆たちに聖書のみことばを教えるはずの教師たちのことを注意 & 警戒するよう、命令しておられます。そこで、今日、私たちは、今から 2000 年前、当時の律法学者たちが抱えていた問題点について見ていきます。

そうすることによって、願わくは、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、彼ら律法学者たちと同じような過ちに陥ることなく…、今一度、皆さんの信仰を吟味してごう、ますます、神様の前に正しい信仰生活を送っていただきたいと思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 12:35-44 をお聞きください。

I・みことばを、正しく理解できていなかった！(35-37 節)

どうぞ、まずは、今日のみことばの内、35-37 節の部分に注目をしていきたいと思えます。そこから分かることは、**彼ら律法学者たちが、いまいち、聖書のみことばを、正しく“理解”できていなかった！**ということです。今日のみことばの内、35-37 節には、このように記されています。

35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた。「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子と言うのですか。」

36 ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。『主は私の主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』

37 ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのに、どういっわけでキリストがダビデの子なのでしょう。」大ぜいの群衆は、イエスの言われることを喜んで聞いていた。

●律法学者たちが誤解していた、メシヤ観とは？

いかがですか？ 今のところを読ませてもらいましたが、皆さんはピンと来ましたが…多分、多くの方が、このみことばを読んだだけでは、いまいち、よく分からないのではないのでしょうか？…正直言って、このみことばは、かつて、私もよく分かっていませんでした。

実は、ここでイエス様が教えてくださっているのは、この当時、律法学者たちが間違っただけで理解していた、「メシヤ観」、つまり、約束の救い主がどういったお方であるか？という点でありました。実は、彼ら律法学者たちは、約束の救い主が、偉大な人物であったとしても、それがただの人間であると勘違いをしてしまっていたのです。

まずは、ここで、無茶苦茶、些細なことを説明させていただきます。実は、この「メシヤ」というカタカナ表記ですが、比較的古い日本語訳聖書では、「メシヤ」というカタカナ表記が使われてあります。ですから、私たちが使っている新改訳の第2版や第3版、また、口語訳聖書では、「メシヤ」と表記されています。しかし、時代の流れでしょうか。新共同訳聖書や新改訳 2017 からは、「メシア」と表記されるようになりました。多分、今後は、「メシア」と表記されていくと思われます。それと同様に、イエス様の母マリヤも、新改訳第2版や第3版までは「マリヤ」ですが、新共同訳や新改訳 2017 以降では「マリア」となっています。

さて、このメシヤ…、つまり、約束の救い主ですが、旧約聖書では、例えば、Ⅱサムエル記 7 章やエゼキエル書 34 章などで預言されていますけれども、今日は時間の関係もあって、1 番分かりやすいと思われる、イザヤ書 9:6-7 だけを紹介させていただきます。そこには、こう預言されています。『6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。』

⇒いかがですか？ このみことばは、よくクリスマスなどで紹介される、約束の救い主に関する預言です。正直、このみことばをよーく観察して下さったら分かると思います。私たちがために生まれてきてくださる、約束の救い主は、「ただの人間」ではありません！ 神なのです！ そうでしょ！…だから、このみことばでも、『主権はその肩にある(とか)、力ある神、永遠の父、平和の君(=「王子」の意)』と呼ばれる、なんて預言されてあるのです！

どうか、皆さん、私たちがつい最近に学んだ、あのぶどう園のご主人様に関する例え話を思い出してみてください。今日のみことばの少し前、マルコ 12 章の前半に記されています。あそこで、そのぶどう園のご主人は、何人ものしもべたちを遣わしましたが、最後に誰を遣わしました？ 『愛する息子』でしょ！…つまり、この例えでも分かる通り、約束の救い主は、普通の人間じゃない！…神のひとり子であったのです！

しかし、そういったことが、あのイエス様の時代の律法学者や民衆たちには理解できなかったのです。…でも、それは当たり前です。無理ありません。だって、すべてを造られた、唯一の造り主なる神様が、人間となって…、しかも、赤ちゃんとなって、御生まれになるなんて、一体誰が想像できたでしょう？

●イエス・キリストは、真の神であられる！

どうぞ、今日のみことばに戻ってみてください。…今日のみことばの初め、35 節で、イエス様が発せられた、『律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子と言うのですか？』というイエス様からの質問であり、イエス様からの問題提起です。実は、今日のみことばでは少し分かりにくいのですが、平行記事であるマタイ伝やルカ伝のみことばを見ますと、この時、イエス様は、律法学者たちやパリサイ人たちに対して、この質問をされたことがわかります。そのイエス様の質問は、「律法学者たちは、どうして、キリスト…、つまり、約束の救い主のことを、「ダビデ以下の存在」とであると考えられるのですか？」というようなものでした…。

例えば、皆さんも、「あの誰々の子(とか)、あるいは、二代目誰々、あるいは、誰々の後継者…」なんて聞くと、その人物は、初代…、つまり、最初の人物よりも偉大な存在だとはあまり思われないうえ？…だって、もしも、後の人物の方が偉大だったら、「2代目誰々」とは呼ばれないじゃないですか？

¹ マタイ 7:15-27、マタイ 24 章、Ⅱペテロ 2:1、Ⅰヨハネ 4:1、黙示録 16:13、その他、旧約聖書に多数

例えば、私はつい最近、アメリカでのこんな報道を耳にしました。今、アメリカのメジャーリーグで大活躍している大谷翔平に関してですが、彼は、ピッチャーとバッターという、プロ野球の世界では分業するはずの仕事や、両方一度にやっちゃっているのです。それ故に、彼のやっていることは、“二刀流”と呼ばれています。「まるで、おおよそ 100 年前に活躍したベーブ・ルースのようだ！」って。しかし、最近の大谷選手を見て、あるアナウンサーは、こんな実況をしたのです、「大谷は2代目ベーブ・ルースじゃない！彼は初代の大谷翔平だ！」って…。皆さん、そのアナウンサーの言わんとしたことを分かってくださいます？

つまり、今日のみことばで言い換えますと、旧約時代に活躍した、あの英雄ダビデと約束の救い主と、どちらが格上か？ということなのです。…どうぞ、今日のみことばの 36 節をご覧ください。ここで、イエス様は、あのダビデ王様と約束の救い主との優劣について、決定的な証拠を提示してくださっています。それが、詩篇 110 篇のみことばです。ここで、イエス様は、詩篇 110:1 のみことばを引用しておられますので、私たちも、その詩篇 110:1 のみことばを参照したいと思います。そこには、こうあります、『【主】は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」』

⇒実は、このみことばは、日本語訳の聖書では、同じ「主」という言葉で翻訳されてはいても、元々書かれた言語であるヘブライ語では違う言葉が使われてあります。そのことが、日本語訳の聖書の中でも、新改訳聖書なら、その違いが分かるように工夫されてあります。まず、この『私』というのは、この詩篇を書き記したダビデのことを指しているというのは明らかです。そして、その前の、少し太字で書かれてある『【主】』(יהוה)という言葉は、聖書の中でも特別な言葉で…、あの十戒の中で、「主の御名をみだりに唱えてはならない！」と命じられてあることから、ユダヤ人たちがまず口にしない特別な言葉で、恐らくは、「ヤハウエ」と発音するだろうと、学者たちの間では言われています。

そして、後の方に出てくる『(私の)主』という言葉は、もう少し一般的な言葉で…、これは、「(自分の)ご主人様(や)、真の神様」のことを指す場合に使われる言葉、「アドナイ」(יהוה)です。実は、彼らユダヤ人たちは、絶対に口にしてはならない「ヤハウエ」という言葉を発音する代わりに、この「アドナイ」という言葉に置き換えて、神様のことを呼んだり、説明したりしたのです。言わば、「ヤハウエ」の代名詞とも言える言葉が、この「アドナイ」なのですが、この文脈では、約束の救い主であられるイエス様のことを指しています。

ちなみに、新改訳聖書で、「わたし」という言葉が漢字で表記されず、ひらがなで表記されてある場合、それらのほとんどは「神様のことか、イエス様のこと」を指しています。今、私が「ほとんど」と言いましたのは、聖書翻訳者の理解によって間違いが有り得るからです。

以上、少々難しい話をしてしまいましたが、ここ詩篇 110:1 のみことばが教えてくれている状況は、「天の父なる神様が、私の主であられるイエス様に、こうおっしゃられた」という話をしているのです。つまり、「あのダビデ王様が、約束の救い主であられるイエス様のことを『私の主』と呼んでいる！」ということ。確かに、旧約時代に活躍したダビデ王は偉大な人物でした。それは間違いありません。…しかし、そのダビデと約束の救い主であられるイエス様とを比較したら、ダビデがイエス様のことを『主』と呼ぶほど、イエス様の方が圧倒的に格上だ！と言うのです。…と言うのも、ダビデは、偉大ではあっても、所詮はただの人間であるのに対して、イエス様は、人間となって生まれてきてくださった“神”であられたからです！ここで、イエス様は、そういったことについて教えてくださったのです。

II・彼らの、間違った 動機 ! (38-40 節)

その次に、このみことばを通して、イエス様が教えてくださっていることは、彼ら律法学者たちが持っていた、間違った“動機”であります。悲しいことに、この当時の律法学者たちは、その理解が間違っていた

だけじゃない。…彼らが持っていた動機も、かなり問題であったのです…。どうぞ、今日のみことばの 38-40 節をご覧ください。そこには、こうあります。

38 イエスはその教えの中でこう言われた。「律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが大好きで、

39 また会堂の上席や、宴会の上座が大好きです。

40 また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」

●彼らの願いは、自分たちの 栄光 ？

ここで、イエス様は、彼ら律法学者たちの願いについて教えてくださっています。彼らは、一体、何を願っているのか？…、どんなことを目的に生きていたのか？時間の都合もあるので、簡単に見ていきましょう。…まず、ここで、イエス様がおっしゃられた『長い衣』ですが、彼らが着ていた衣の長さというものは、その権威の象徴でありました。だから、長ければ長いほど、偉かったのです！…それは、ちょうど、現代ではフランス料理のコックさんが、偉くなるほど、長い…、背の高い帽子を被っているのに似ていると思います。

また、彼らは、挨拶を“される”のが好きであるとイエス様はおっしゃいます。自分から挨拶をして…、他の人を思いやるとか、元気の無い人を気遣うとかではなくて…、他人から“敬われる”ことが好きだったので。だから、その後の 39 節にもあるように、彼らは、会堂でも偉い人が座る席や宴会をしても、目上の人たちが座る席に座ることが好きだったので。…言わば、彼ら律法学者たちの願いは、自分たちの“栄光”であった！と言い得るのではないのでしょうか？

そうして、ここ 40 節で、イエス様は、もう少し、彼ら律法学者たちの問題点を説明してくださっています。例えば、それは、「やもめの家を食いつぶす」ということであります。「やもめ」と言いますのは、所謂、「ご主人を失ってしまった未亡人」のことです。この当時の社会で、やもめたちというのは、社会的に最も弱い立場の者たちでした。だから、新約聖書の中には、彼らやもめたちに対する援助などについて教えられているわけです。しかし、律法学者たちは、何と、やもめたちのことを守ろうとしないで、その者たちの家を食いつぶしていたというのです。

また、彼ら律法学者たちは、自分たちの見栄のために、わざと長い祈りを捧げておりました。…と言うのは、彼らの中に、長い祈りを捧げる自分たちこそ、信仰熱心である。敬虔な信仰者であるというような勝手な思い込みがあったからです。

そもそも、「祈り」というものは、本来、神様をあげ、神様のみこころに私たちの願いを添わせるために捧げるべきものであります。これも、また、神様に栄光を帰すための1つの行為であり…、神様が喜んでくださる「礼拝の1つの行為」です。…しかし、それを律法学者たちは、自分たちの栄光のために使ったわけで、言わば、彼ら律法学者たちは、神様からの栄光を奪ったと言い得るのかも知れません。

このように、私たちが、祈りや、今日この後で見ていく捧げ物などの本質を忘れて、その祈りを捧げること自体が目的になってしまったり、捧げ物を捧げることや、あるいは、礼拝に出席することが目的になってしまうと、私たちは、いつの間にか、何のために、祈りを捧げ…、何のために捧げ物を捧げ、何のために礼拝に参加しているのか？という、1番の目的を見失ってしまいます。…そうでしょ！だから、私たちは、いつもいつも、何のために、私はこれをしているのか？神様は、何を期待して、この命令を与えられたのか？というようなことを考えることが大事なのです…。

さて、ここで、イエス様が当時の律法学者たちについて、どんな警告を与えておられたのか？ということを紹介させていただきます。マタイ 23 章には、こう記されてあります。『13 わざわいだ。偽善の律法学者、パリ

サイ人。おまえたちは人々から天の御国をささげているのです。自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせません。14 [わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見えのために長い祈りをしています。だから、おまえたちは人一倍ひどい罰を受けます。] 15 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。』(マタイ 23:13-15)

⇒皆さん、分かってくださいますか？…彼ら律法学者たちは、自分たちが救われていなかっただけじゃない！その逆に、救われそうな人たちのことを邪魔していた！とあります。…確かに、彼らはユダヤ教に改宗する者たちを作ることに熱心だったかも知れませんが、それはイエス様から見た時、ゲヘナの子にする…つまり、実は、その者たちも救われていなかっただけじゃない！とイエス様はおっしゃるのです。…と言うのも、彼ら律法学者たちは、神様のためじゃない！自分たちの見栄や栄光のために、わざわざ、長い祈りを捧げたり、様々な慈善活動をしたり、神の律法を教えていたからです。

●神様が警告されている、厳しい 裁き

どうぞ、今日のみことばの 40 節後半をご覧ください。そこで、イエス様は、そんな彼らが受けるべき裁きについて教えてください。『…こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けます。』って…。ここだけではありません。聖書のみことばは、何度も、「教える者たちが受けるべき裁きは厳しいものである！」という警告を与えてくれています。

特に有名なのは、ヤコブ 3:1、『私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けます。』というみことばです。…だから、私たち教師は、いい加減な思いや間違っただけで、教師になつたりしてはいけません！

正直言って、いろんな教会や牧師先生方のメッセージ、あるいは、「クリスチャンたちだ」という者たちの SNS での書き込みを見てみると、時々、ひどいものがあります。間違いも間違い…、大間違いです！…でも、そんな考えであっても、彼らには、「自分たちが間違っている」ということに気付けないのです。…と言うのも、彼らは、聖書を正しく解釈することも…、何が真理かも知らないのです。しかも、彼らの言うことは、マタイ 7:1 に『さばいてはいけません。さばかれたいからです。』というみことばを盾にして、「人を非難してはいけません！クリスチャン同士仲良くしていきましょう！」と言って、どれが正しくて、何が真理であるかを真剣に追究しようとはしないのです！

だって…、迷惑なのは、そういうふうないい加減な教師たちのせいで、一体、どれだけの人たちが、どれほど大きな迷惑をこうむっていると思いますか？…皆さん。その昔、旧約の時代に、間違っただけを教えた預言者がどんな裁きを受けたかご存知ですか？⇒彼らは皆、殺されなければならなかったのです…。

いえ、旧約の時代だけではなく、例えば、あのパウロはガラテヤ 1:9 で、『…もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろまれるべきです。』と教えます。…良いですか？福音に反するようなことを教えるような者は呪われて燃るべきなのです。もちろん、人間誰にだって、間違いはあります。だから、私たち説教者たちはできるだけ、聞く耳を持って…、また、「自分が間違っているかも知れない！」という謙虚さをもって、常に、みことばを学び続ける者でなければならぬのです。

しかし…、時々、私が聞かされるメッセージは、「聖書はこう教えています！」と言いながら、「でも、私は、こう教えます！」と言って、聖書が教えていることを、あからさまに否定しておられるのです。…一体、自分が何様になったつもりなのでしょう？…でも、悲しいことに、現代には、そういうふうなメッセージが少なからず、講壇から語られている傾向にあるのです。

Ⅲ・間違っただけによる、被害者！（41-44 節）

さて、最後に、この当時の律法学者たちの間違っただけによる、どんなことが起こっていたか？その具体的な“被害者”について見ていきましょう。どうぞ、今日のみことばの内、41-44 節をご覧ください。そこには、ある有名な出来事について記されています。

41 それから、イエスは献金箱に向かってすわり、人々が献金箱へ金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちが大金を投げ入れていた。

42 そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。それは一コドラントに当たる。

43 すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。

44 みな、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。」

●私たちが正しく聖書を理解するために考えるべきこと？

恐らく、このエピソードをご存知ない方は、ほとんどおられないでしょう。…それほど、このエピソードは有名な出来事です。この時、イエス様は、献金箱に向かって座っておられました。恐らく、ここでイエス様が経験された出来事は、あのエルサレムの神殿の敷地内にあった「婦人の庭」での出来事だと思われれます。…すると、何人かの金持ちたちは大金を投げ入れていたそうです。しかし、そこに、1人の貧しいやもめがやって来ます。そのやもめは、レプタ銅貨を2つ投げ入れたとあります。このレプタ銅貨2つと言いますのは、当時の貨幣価値で、1コドラント…、1日分の労働賃金の「1/64」に相当します。つまり、1日の労働賃金を1万円とすると、その1/64ということで、150円ほどです(1レプタは、その半分)。

しかし、イエス様は、そのやもめが捧げた、たった150円ほどの献金が、『どの人よりもたくさん投げ入れた…』とおっしゃいます。その理由は、今日のみことばの最後、44 節でイエス様が教えてくださったように、『みな、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたから』です。何だか、この日本語に翻訳されたみことばを読んでみますと、ここで、イエス様はこの貧しいやもめの献金と言うか、彼女の信仰を称賛されているかのように見えます。しかし、本当でしょうか？

実は、最近…、と言っても、もう数年前になりますが、私は、この聖書解釈を、あの岡田先生から、こう聞きました、「このみことばは、本当に、貧しいやもめが捧げた献金を模範的なものとして、イエス様が紹介されたのでしょうか？私は、そういう模範ではなくて、あの律法学者たちが、必要以上の重荷を民衆たちに負わせていた、ということの具体的な事例を紹介するために、このみことばが書かれたのだと考えています。」って…。正直言って、それを聞いた直後は、私も驚きました。…と言いますのも、そんな聖書解釈は聞いたことがなかったからです。

しかし、私は、これまで、「聖書を正しく解釈する上で、1番大切なのは、その文脈である」と教わってきました。皆さんも、そうじゃないでしょうか？…じゃあ、このエピソードは、どういった文脈で…、どういった話の流れで書き記されたのでしょうか？

ここ 41-44 節のエピソードが記されてある前後の文脈を見てみますと、このやもめの献金のエピソードが、彼女の信仰を称賛しているとか、あるいは、それを模範とするように教えているのだとしたら、このエピソードが少し浮いているように、私には見えます。でも、そうではなくて…、このエピソードを、その少し前にある、40 節の、「律法学者たちが、やもめたちの家を食いつぶしている」ということ、の“実例”として紹介するために、このエピソードを挿入したと考えると、“しっくり”くるように、皆さんは思われませんか？

ぜひ、こういった機会に、皆さんに知ってほしいのは、私たちが聖書を正しく理解しようとする時、私たちが何を学んだか？とか、あるいは、どういったところに感動したか？というのは、二の次三の次に考えるべきことであって、私たちが聖書を“正しく解釈”しようとする時に、1番考えるべきことは、“そのみことばが書き記された意図や文脈”であります。一体、神様は、どういった意図や目的で…、あるいは、どういった話の流れで、そのみことばを書き記されたのか？ということを考えることが重要なのです。…さもすると、私たち説教者は、どこのみことばを読んでも、「ここから、こんなメッセージが語れるなー。ここで、こんな神学や模範を説明できるなー」というような感じで、自分の言いたいことを、聖書のみことばを使って主張してしまう危険性があります。しかし、それらは、聖書の正しい“解き明かし”ではありません。

● 間違った教えによって、多くの者たちが 惑わされる !

皆さんも、よくご存知だと思います。この当時、民衆たちに神様のみことばである律法などを教えていた律法学者たちの信仰を、果たして、イエス様は評価されたでしょうか？⇒いいえ。イエス様は、ほとんどの場合、彼ら律法学者たちの信仰やその教えの多くを否定しておられます。先程紹介したマタイ 23章のみことばだって、イエス様は、彼らのことを名指して、「偽善だ！ 偽りだ！ 彼らは自分たちも救われていないし、人を救いへと導けない！」と教えておられたでしょ！

確かに、このみことばで、イエス様は、この貧しいやもめが捧げた献金を、『どの人よりも“たくさん”投げ入れました』と教えてくださっています。でも、それは、あくまでも、残った金額との比率であって、実際に、このやもめが、多額の献金を捧げたわけではありませんでした。そうでしょ？…本当に、イエス様は、その貧しいやもめが献金する姿をご覧になって、「それを模範としなさい！ あなたがたも、彼女を見習って、同じようにしなさい！」ということを教えたかったのでしょうか？…もしも、そうだとすると、イエス様は、このみことば以外でも、同じようなことを教えておられるはずですけども、正直言って、私には、そういった教えやエピソードが浮かんできませんでした…。

もちろん、イエス様が、あの金持ちの青年役人に勧められた、「あなたの持ち物を(全部)売り払って貧しい人たちに与えなさい！」と言われたことや、使徒の働きで、アナニヤとサツピラが自分たちの財産を売った後で、嘘をついて、神様に裁かれた！というエピソードは、それぞれ別の意味があるので、それらは別です。

でも、今日、ぜひ、皆さんに分かっていただきたいし…、また、このみことばが間違いなく、教えてくれていることは、当時の律法学者たちのいい加減な信仰や間違った教えなどで、その当時の多くの者たちが、被害や迷惑をこうむってしまったという、残念な現実です…。

< 励ましの言葉 >

今日、私たちは、イエス様の時代の律法学者たちが抱えていた3つの問題点について見てきました。…でも、皆さん、気付いてくださいました？…実は、今日のメッセージの表題は、「律法学者たちの“功罪”」というタイトルにさせていただきました。「功罪」と言いますのは、「称えられるべき成果と、咎められるべき過ち。(あるいは、)功績と罪。(あるいはまた)良い影響も、悪い影響も同時にもたらすさま」を表わす時に使われるべき表現です。

しかし、今日、私たちが学んだ律法学者たちの与えた影響は？と言うと、悪いものばかりで、良いものは1つも学ばませんでした。…しかし、いつも言いますように、この当時の教師たち…、律法学者たちも、パリサイ人たちが皆、彼らは神様からのお言葉である聖書を民衆たちに教え…、その模範を示すべき立場に居たのです！…そういった意味におきましては、彼らは皆、貴重な教師であり…、彼らのおかげで、民衆たちは聖書のみことばに触れることができたわけです。

しかし、私たちが今日学んだマタイ 23章で、イエス様が教えてくださったように、彼ら律法学者たちがしていたことは、残念ながら、イエス様の目から見た時、律法学者たちの功績や良い影響は、ほとんど無かったと言うべきかも知れません。それほど、彼らの教えや言動には問題があったのです！

今日、最後に、私が皆さんに問いたいことは、果たして、私たちの聖書理解や、普段、私たちが話したり行動したりしていることは、本当に、神様が喜んでくださっているかどうか？ということですよ。それらを、ある程度、正しく評価できるのは皆さんだけです！私ではありません。…もちろん、最後、究極的に正しく裁かれるのは、裁き主なる神様です。神様は、私たちの心の奥底に潜む罪も、隠れた動機も、すべて御存知です！だから、私たちは何一つ、神様に弁明できないのです。…果たして、皆さんは、その神様に喜ばれるような人生を歩んでいらっしゃるでしょうか？

そうして、皆さんの聖書理解やその解釈は、自分の勝手な思い込みと言うか、「私は、こう解釈した方が、自分にとって都合が良いから、こう考えます！」というような自分勝手なものではないでしょうか？…あるいは、皆さんは、本当に、純粋なみことばを求め…、正しく聖書のみことばを解き明かしてくれるような教師を求めていらっしゃるでしょうか？…正直言って、私自身は優れた説教者…、有能な牧師ではありません。でも、だからこそ、自分なりに工夫をして…、いろいろな“小細工”と言うか…、どうしたら、皆さんに分かってもらえるのか？というようなことを考えて、試行錯誤しています。

どうか、今日、このメッセージを聴いてくださった皆さんには、ますます、聖書のみことばによって、神様の素晴らしさを学んでくださって、あの律法学者たちのようなのではなく…、純粋な聖書のみことばを追い求めていていただきたいと思います。「あそこの教会は、家から近いから…。あそこの教会には、自分の親友が通っているから…。あそこの教会なら、駐車場があるから…。たくさんのイベントを催しているから…」とか、そういったような理由からではなくて、私たちがクリスチャンが1番に優先し…、1番に恋慕すべき、みことばでもって、判断していていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。